

# 最大充足可能性問題の疎な例題に対する厳密アルゴリズム

脊戸 和寿\*

## Solving Sparse Instances of Max SAT via Width Reduction and Greedy Restriction

Kazuhisa SETO\*<sup>1</sup>

**ABSTRACT** : We present a moderately exponential time polynomial space algorithm for sparse instances of Max SAT. For instances with  $n$  variables and  $cn$  clauses, our algorithm runs in time  $O(2^{(1-\mu(c))m})$ , where  $\mu(c) = O(1/c^2 \log^2 c)$ . Previously, an exponential space algorithm with  $\mu(c) = O(1/\log c)$  was shown by Dantsin and Wolpert [SAT 2006] and a polynomial space algorithm with  $\mu(c) = O(1/2^{O(c)})$  was shown by Kulikov and Kutzkov [CSR 2007]. Our algorithm is based on the combination of two techniques, width reduction of Schuler and greedy restriction of Santhanam.

**Keywords** : exponential time algorithm, polynomial space, satisfiability

(Received March 25, 2005)

### 1. はじめに

最大充足可能性問題(Max SAT)とは、入力として与えられる節集合に対し、充足可能な節の最大数を求める問題である。

節とはリテラルの論理和であり、リテラルとはブール変数とその否定である。また各節が高々 $k$ 個のリテラルしか含まないものをMax  $k$ -SATと呼ぶ。これらの問題は代表的なNP困難問題の1つである。 $n$ 変数、 $m$ 節からなるMax SATのインスタンスが与えられたとき、自明に $O(m2^m)$ 時間で解ける。我々の目標は、Max SATをある絶対定数 $\mu > 0$ に対して、 $O(\text{poly}(m)2^{(1-\mu)m})$ 時間で解くことである。しかし、この目標達成は $m$ に制限がないと非常に困難である。そこで我々は $m=cn$ に制限した疎な例題に焦点をあてる。Max SATの疎な例題に対しては既に、DantsinとWolpertによって $\mu(c) = \Omega(1/(\log c))$ の指数領域アルゴリズムが示されている [DW06]。また、KulikovとKutzkovによって $\mu(c) = \Omega(1/2^{O(c)})$ の多項式領域アルゴリズムが示されている [KK07]。本稿では、これらの結果を改良し、 $\mu(c) = \Omega(1/c^2 \log^2 c)$ の多項式領域アルゴリズムを与える。

### 1. 1 アルゴリズムに用いる手法

まず、Santhanamのformula SATに対するgreedy restriction algorithmを用いて、Max  $k$ -SATが $\mu(c) = \Omega(1/k^2 c^2)$ 時間で解けることを示す。次に、Max SATのインスタンスをMax  $k$ -SATのインスタンス集合に変形する。このとき、元のインスタンスの最適解はいずれかのMax  $k$ -SATのインスタンスの最適解に保存される必要がある。そのために、Schulerのwidth reductionを用いる [Sch05]。これらを組み合わせることで、所望の結果を得る。

### 2. 準備

$V = \{x_1, \dots, x_n\}$ をブール変数集合とする。ブール値の'true'を1, 'false'を0で表現する。変数 $x \in V$ の否定を $\bar{x}$ と表記する。リテラルは変数またはその否定である。

$k$ -constraintはブール関数 $\phi: \{0,1\}^k \rightarrow \{0,1\}$ であり、 $V$ の $k$ 変数に依存する。0-constraintは'0'または'1'の定数関数を表す。Max CSPのインスタンス $\Phi$ は制約と重みで構成される。各 $\phi_i$ が $k_i$ -constraintで $w_i$ が正の数として、 $\Phi = \{(\phi_1, w_1), \dots, (\phi_m, w_m)\}$ と表す。 $\Phi$ の幅を $\max_i k_i$ とする。 $\text{Val}(\Phi, \mathbf{a}) := \sum_{i \in [m]} w_i \cdot \phi_i(\mathbf{a})$ とし、 $\text{Opt}(\Phi) := \max_{\mathbf{a} \in \{0,1\}^n} \text{Val}(\Phi, \mathbf{a})$ とする。 $y_1, \dots, y_l$ を任意のリテラルとすると、Max SATは、各制約が $y_1 \vee \dots \vee y_l$ の形で表される。また、インスタンスには、0-constraintsが存在することを許す。

\* : 理工学部情報科学科助教 (seto@st.seikei.ac.jp)

### 3. Max formula SATに対するGreedy Restriction Algorithm

本章では、各制約がド・モルガン式で与えられるMax CSPに対するアルゴリズムを導入する。これは、Max k-SATも解くことができる。

#### 3.1 ド・モルガン式とその単純化規則

ド・モルガン式は、葉がリテラル  $\{0,1, x_1, \dots, x_n, x_1', \dots, x_n'\}$  により、内部ノードが  $\vee$  または  $\wedge$  によりラベル付けされた2分木で表現される。ド・モルガン式  $\phi$  が与えられたとき、 $\phi$  の部分式とは  $\phi$  の部分木をいう。 $\phi$  のサイズは、葉の数で定義し、 $L(\phi)$  と表記する。 $\text{var}(\phi)$  を  $\phi$  にリテラルとして存在する変数の集合とする。 $\phi$  に存在する変数  $x$  の頻度を、 $x$  または  $x'$  でラベル付けされた葉の数で定義し、 $\text{freq}'_{\phi}(x)$  と表記する。

式  $\phi$ 、変数集合  $\{x_{i1}, \dots, x_{ik}\}$ 、定数  $a_1, \dots, a_k \in \{0,1\}$  に対し、 $x_{ij}, x'_{ij}$  にそれぞれ、 $a_j, a'_j$  を割り当て、さらに図1の手続きSimplifyを適用することにより、 $\phi$  から得られる式を  $\phi[x_{i1}=a_1, \dots, x_{ik}=a_k]$  と表記する。この手続きにより、式のサイズは小さくなる。これは、[Has98, San10] で用いられた単純化規則と同じである。Simplifyは、 $\phi$  のサイズの多項式時間で動作し、単純化により得られる式は  $\phi$  と同じ関数を計算する。

```
Simplify( $\phi$ : formula)
Repeat the following until there is no decrease in size of  $\phi$ .
(a) If  $0 \wedge \phi$  ( $0 \vee \phi$ ) occurs as a subformula, where  $\phi$  is any formula, replace this subformula by  $0$  ( $\phi$ ).
(b) If  $1 \wedge \phi$  ( $1 \vee \phi$ ) occurs as a subformula, where  $\phi$  is any formula, replace this subformula by  $\phi$  ( $1$ ).
(c) If  $y \vee \phi$  ( $y \wedge \phi$ ) occurs as a subformula, where  $\phi$  is a formula and  $y$  is a literal, then replace all occurrences of  $y$  in  $\phi$  by  $0$  ( $1$ ) and all occurrence of  $y'$  by  $1$  ( $0$ ).
```

図1 単純化規則

#### 3.2 Max formula SATアルゴリズム

Max formula SATは各制約がド・モルガン式であるMax CSPである。つまり、各  $\phi_i$  がド・モルガン式で与えられる。 $\text{var}(\Phi) := \cup_{i \in [m]} \text{var}(\phi_i)$ ,  $L(\Phi) := \sum_{i: L(\phi_i) \geq 2} L(\phi_i)$ , そして  $\text{freq}'_{\Phi}(x) := \sum_{i: L(\phi_i) \geq 2} \text{freq}'_{\phi_i}(x)$  と定義する。任意のインスタンス  $\Phi$ 、任意の変数集合  $\{x_{i1}, \dots, x_{ik}\}$ 、任意の割当  $a_1, \dots, a_k \in \{0,1\}$  に対して、 $\Phi[x_{i1}=a_1, \dots, x_{ik}=a_k] := \{(\phi_1', w_1), \dots, (\phi_m', w_m)\}$  と定義する。ここで、 $\phi_i' = \phi_i[x_{i1}=a_1, \dots, x_{ik}=a_k]$  である。図2はMax formula SATアルゴリズムである。

```
EvalFormula( $\Phi = \{(\phi_1, w_1), \dots, (\phi_m, w_m)\}$ ): instance, n: integer)
01: if  $L(\Phi) = cn < 3n/4$ ,
02:   compute  $\text{Opt}(\Phi)$  and return  $\text{Opt}(\Phi)$ .
03: else
04:    $x = \text{argmax}_{x \in \text{var}(\Phi)} \text{freq}'_{\Phi}(x)$ .
05:    $K_0 \leftarrow \text{EvalFormula}(\Phi[x=0], n-1)$ .
06:    $K_1 \leftarrow \text{EvalFormula}(\Phi[x=1], n-1)$ .
07:   return  $\max\{K_0, K_1\}$ .
```

図2 Max formula SATアルゴリズム

アルゴリズムの計算時間は以下の通りである。

定理1.  $n$ 変数、 $L(\Phi) = cn$ のMax formula SATのインスタンス  $\Phi$  が与えられたとき、EvalFormulaは、 $\text{Opt}(\Phi)$  を  $O(\text{poly}(n)2^{(1-\mu(c))n})$  時間で計算する。ここで、 $\mu(c) = 1/32c^2$  である。また、 $n$ 変数、 $cn$ 節のMax k-SATのインスタンス  $\Phi$  の最適解  $\text{Opt}(\Phi)$  を  $O(\text{poly}(n)2^{(1-\mu(c))n})$  時間で計算する。ここで、 $\mu(c) = 1/32k^2c^2$  である。

### 4. Max SATアルゴリズム

この章では、主結果であるMax SATの疎なインスタンスに対するアルゴリズムを示す。アルゴリズムは以下である。

```
MaxSAT( $\Phi = \{(\phi_1, w_1), \dots, (\phi_m, w_m)\}$ : instance, k, n: integer)
01: if  $\forall \phi_i \in \Phi, |\text{var}(\phi_i)| \leq k$ ,
02:   return EvalFormula( $\Phi, n$ ).
03: else
04:   Pick arbitrary  $\Phi_i = (l_1 \vee \dots \vee l_k)$  such that  $k' > k$ .
05:    $\Phi_L \leftarrow \{\Phi \setminus \{(\phi_i, w_i)\}\} \cup \{(l_1 \vee \dots \vee l_k), w_i\}$ .
06:    $K_L \leftarrow \text{MaxSAT}(\Phi_L, k, n)$ .
07:    $\Phi_R \leftarrow \Phi[l_1 = \dots = l_k = 0]$ .
08:    $K_R \leftarrow \text{MaxSAT}(\Phi_R, k, n)$ .
09:   return  $\max\{K_L, K_R\}$ .
```

図3 Max SATアルゴリズム

以下は本稿における主定理である。

定理2.  $n$ 変数、 $cn$ 節のMax SATのインスタンス  $\Phi$  が与えられたとき、MaxSATは、 $\text{Opt}(\Phi)$  を  $O(\text{poly}(n)2^{(1-\mu(c))n})$  時間で計算する。ここで、 $\mu(c) = 1/c^2 \log^2 c$  である。

## 参考文献

- [DW06] E. Dantsin, A. Wolpert : “MAX-SAT for formulas with constant clause density can be solved faster than in  $O(2^n)$  time”, In Proc. of SAT, LNCS 4121, pp. 266-276, 2006
- [Has98] J. Hastad: “The Shrinkage Exponent of De Morgan Formulas is 2”, SIAM J. Comput”, 27(1):48--64, 1998
- [KK07] A. S. Kulikov and K. Kutzkov: “New Bounds for MAX-SAT by Clause Learning”, In Proc. of CSR, LNCS 4649, pp.194-204, 2007
- [San10] R. Santhanam: “Fighting Perebor: New and Improved Algorithms for Formula and QBF Satisfiability”, In Proc. of FOCS, pp.183-192, 2010.
- [Sch05] R. Schuler: “An algorithm for the satisfiability problem of formulas in conjunctive normal form”, Journal of Algorithms, 54:40-44, 2005.